研究委員会企画シンポジウム 2

今、差別を考える

——社会心理学からの提言——

Social Psychology of Prejudice: Implications for School Teachers

YASUKO MORINAGA, KEN-ICHI OHBUCHI, TOMOKO IKEGAMI, FUMIAKI TAKA,
TOSHIO YOSHIDA AND TSUGUYUKI IZUMI

企画・司会 森 永 康 子 (広 島 大 学)
話題提供 大 淵 憲 一 (放 送 大 学)
企画・話題提供 池 上 知 子 (大 阪 市 立 大 学)
話題提供 高 史 明 (神 奈 川 大 学)
企画・指定討論 吉 田 寿 夫 (関 西 学 院 大 学)
指定討論 伊 住 継 行 (環 太 平 洋 大 学)

問 題

社会心理学分野でも学校現場でも、「差別」をなくそうという試みは長い間続いている。しかしながら、「差別」はそうした努力をあざ笑うかのようになり、時代とともにそのターゲットや形を変えながら、連綿と存在している。このシンポジウムでは、今一度、基本に戻り、そもそも人はなぜ公正になれるのか、そして、なぜ差別がなくならないのかを考え、形を変えた現代の差別の特徴をもとに、「差別」を学校現場でどのように扱うことができるのかを考えてみたい。

話題提供

公正感の起源と差別

大淵憲一

心理学では伝統的に、人間行動は基本的には利己的動機（自己利益の維持・増大を求める）によるとみなされてきたが、非利己的動機を仮定する研究者もいる。それは社会的動機、利他的動機などと呼ばれてきたが、公正動機もこれに含まれる。

人の行動が公正動機によって影響を受けているかどうかを調べる簡便な方法は経済行動ゲームである(Thaler & Sustein, 2008 遠藤 2009)。例えば、その一つである独裁者ゲームでは、参加者は一定量の金品を渡され、それを別のひとと分配するように指示される。その際、どのように分配するかは参加者に任せられると言わ

れる。もしも人間が利己的動機だけで行動するならば、参加者は金品の多くを自分の取り分とし、他の人にはごくわずかしかなど渡さないであろう。しかし、実際にこうしたゲームをさせてみると、そうした不平等分配は起こらず、多くの参加者は金品を半分ずつ平等に分けようとするのである (Harbaugh, Krause, & Liday, 2002)。

平等分配をしようとする参加者の心理には「他の人からどん欲だと思われたくない」「自分自身、公平な人間でありたい」「半々に分けるのが社会常識」などがあると思われるが、これらは公正動機存在を示唆している。こうした経済行動ゲームは世界中で実施され、その結果はおおむね一致している。成人の過半数は半々ずつ分ける平等分配を選択するが、子どもも10歳くらいになるとほぼ同様の行動を取るようになる。それより年少の子どもたちは自分が多くを取ろうとするが、子どもたちは何歳頃から不平等分配を避けるようになるのだろうか。

スイスの研究者 Fehr, Bernhard, & Rockenbach (2008) は3—7歳の子どもたちにA, Bふたつのプレートを示し、「Aを選ぶとあなたはお菓子を1個もらえます。お友達は何ももらえません。Bを選ぶとあなたもお友達も1個ずつお菓子がもらえます。あなたはAとBのどちらがいいですか?」と聞いた。不平等を避けようと思えばBを選ぶことになるが、7—8歳児になって初めてBの選択率が50%を有意に超えた。別の条件は不平等回避が自己利益のコストを伴う状況であった。プレートBは同じだが、Aでは子ども自身の菓子は2個、友達はゼロである。平等分配(B)を選ぶと自分の取り分が減るという状況では、B選択は3—4歳児にはほとんど見られず、7—8歳になってようやく半数弱に見られるようになった。これらの結果は、7—8歳頃から公正動機が芽生え、子どもの行動に影響を与えることを示している。

他の霊長類にも公正動機はあるのだろうか？ de Waal たちが行ったある実験 (Horner, Carter, Suchak, & de Waal, 2011) では、チンパンジーの檻の中に赤と緑のトークンが入ったバスケットを置き、被験体の中から一つを取り出して実験者に渡すと報酬（食料）が与えられた。赤のトークンを選ぶと自分だけが報酬をもらえるが、緑のトークンを選ぶと、自分だけではなく隣の檻にいる別のチンパンジーも報酬がもらえるようにしたところ、緑を選択する割合が50%を有意に超えたことから、著者たちはチンパンジーも仲間に配慮した公正行動を行っているとして解釈した。

子どもや霊長類の協力行動を調べている研究者たちは公正の功利理論を提唱している。その一つは de Waal たちの協力関係形成論である (Brosnan & de Waal, 2014)。人間を含め霊長類には血縁関係を越えた協力行動が見られる。しかし、公正さを無視して搾取を行う利己的個体は協力関係から排除される。狩りや防衛などの場面では協力が不可欠なので、協力関係から排除されることは生存を危うくするものである。これを避けるため個体は「搾取をしない、公正な」という評判を形成するために、普段から公正に適った行動をしようとすると努めるのである。

類似の考え方は評判操作 (Izuma, 2012) を強調する互酬性論にも見られる。「情けは人のためならず」という成句が意味するように、人々が他の人を助けるのは巡り巡って自分が困ったときに誰かから助けしてもらえること（間接的互酬性）を期待するからである。利己的行動によって悪い評判がたつとこのネットワークから排除されてしまう恐れがある。間接的互酬性のネットワークに包含されるためには「寛大」「親切」などの好人物評判を得ることが重要である (Nowak & Sigmund, 2005)。人の目があるところでは5歳児でも利他的行動が増えた (Leimgruber, Shaw, Santos, & Olson, 2012; 奥村・池田・小林・松田・板倉, 2016)。評判が重要であることは3—5歳の幼児でも、援助的な人を好み、反社会的な人には罰を与えようとするところからも示唆されている (Hamlin, Wynn, Bloom, & Mahajan, 2011)。

公正の功利理論によれば、人々は今後も付き合いが続くと予想される人たちに対しより強く公正に振る舞うよう動機づけられる。その対象は内集団成員である。Fehr たちの実験に参加した子どもたちは、同じ幼稚園・学校の子どもに対して平等分配をより多く示した。外集団成員に対する平等分配は内集団成員に対するよりも15—20%少なかった。また、観察者が内集団成員のときには幼児の評判操作が強まるとの知見

Figure 1 公正動機の発達と差別の発生

(Engelmann, Over, Herrmann, & Tomasello, 2013) も功利理論を支持するものである。

対人間、集団間に紛争は頻繁に発生し、それは時には深刻なものとなる。紛争解決の主要原理の一つは公正であるとされる。それは、公正が当事者たちに自己利益を超えた視点からの解決策をもたらしうるからである。しかし、もしも公正動機が利己心に根差すもので、内集団成員を対象とするものであるなら、それは外集団成員に対する差別的な扱いを促し、紛争をむしろ激化させるものではないだろうか。

公正動機は他者への配慮など向社会的関心を含んでいる。公正の功利理論に対して、Tomasello (2009 橋彌訳 2013) は、子どもは、本来、無条件の利他的関心を持つと主張する。彼らは、3歳未満の幼児が、相手が誰であれ、お菓子を分け与えたり、困っている人を見ると手助けをしようとするという観察結果を報告している。日本人幼児を対象にした Kanokogi et al. (2017) の研究も類似の結果を示している。

利己性が人間の基本的志向性であることは否定できない。更に早期の向社会的性が無条件なものであるとしても、子どもは認知発達と社会化によってそれを利己性と統合させるために内集団成員に限定するようになり、これに伴って内集団びいきと外集団差別が生じてくるものと思われる (Figure 1)。

差別はなぜなくなるのか—平等主義のパラドクス 池上知子

多様性と社会的共生

ダイバーシティの推進と共生社会の実現は、現在、国際社会が取り組むべき最重要課題となっている。社会に活力をもたらし、イノベーションを起こすには、多様性を高める必要があることは多くの人が認めるところであろう。ただし、社会の構成員の多様性が高まれば、異質で多様な他者を理解し互いに認め合うことが求められる。このような共生社会を実現するには、

人間はみな平等であり、優劣や貴賤の別はないとする博愛精神に基づく平等主義思想の共有が前提となる。しかしながら、集団内部の多様性が増すと、そこに軋轢や対立が生まれるのが人間社会の現実である。実際、人権教育が普及し、平等主義的価値観が共有されているはずの現代においてなお、時代に逆行するかのような事案は後を絶たない。

2016年7月に起きた相模原事件¹は、人権意識の高揚や平等主義的規範の定着をめざしてわれわれが長年にわたり積み重ねてきた努力が無に帰されたような暗澹たる思いを社会にもたらした。それは、差別の正当化につながりかねないとして、はるか以前に明確に否定されたはずの危うい思想（優生思想等）を彷彿させる事件であったからであろう。加えて、容疑者が事件を起こした動機について、「障害者は不幸を作ることしかできないから」と語ったことが報道されると、インターネット上に、これに共感するような書き込みが相次いだこともわれわれをさらに落胆させた。和光大学名誉教授である最首悟氏は、事件について、「いまの日本の社会の底には、生産能力のない者を社会の敵と見なす冷め切った風潮がある。この事件はその底流がボコッと表面に表れたもの」というように評している²。

平等主義のパラドクス

社会心理学は、その黎明期より、なぜ差別がなくなるのか、どのようにすれば差別をなくすことができるのかという問題に様々な角度からアプローチしてきた。だが、そこで示されてきた知見は総じて悲観的である。池上（2014）は、この点について、「差別的行動や偏見に基づく思考は、人間が環境への適応のために獲得したさまざまな心理機制に由来しており、それらはわれわれの意識を超えた形で働き、これを統制することが極めて困難であること、それにもかかわらず、社会心理学はそれらを個人の意志と努力によって制御することを推奨してきたことが、問題を複雑化させる結果となっている」と論じている。たとえば、リバウンド効果に関する研究（Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994）では、対象（e.g., スキンヘッドの青年）にかかわるステレオタイプの観念を想起しないように意識レベルで強く抑制すると、無意識レベルでは、逆に活性

化が強まり、差別的言動が表出されやすくなることが示されている。これに対し、意図的抑制を強いるのではなく、単に対象をポジティブな社会的文脈のなかに配置する（黒人が家族と団欒している、入院中のエイズ患者のところに家族が見舞いに来る）ことで、対象とネガティブな観念との連合の活性化が抑制されることが示され、偏見緩和の方法として注目された（Allen, Sherman, & Klauer, 2010; 大澤・池上, 2014; Wittenbrink, Judd, & Park, 2001）。

けれども、情動と結びついている観念は、表出への動機を潜在させているため、これを制することはなかなかむずかしい。それをよく記述しているのが、偏見の正当化-抑制モデルである（Crandall & Eshleman, 2003）。これによると潜在的偏見は、平等主義規範等によって表出を抑制されると葛藤が生じ、これを低減しようと偏見を正当化する言説（自己責任論等）を探し、抑制効果が無効化されると考えられている。伝統的家族規範を信奉している者ほど、潜在レベルの同性愛嫌悪を顕在化させやすいという Adachi & Ikegami (2019) の知見は、一つの傍証といえる。

また、平等主義的価値観と対立するイデオロギーが弱者支援を阻むことがある。われわれには、集団間の序列を是とし、その維持を欲するところがある。社会的支配志向性と称されるこうした心性は差別的態度を助長する（Sidanius & Pratto, 1999）。木田・矢田・池上（2017）は、社会的支配志向性の高い者は、概して障害者に対する支援策への賛意が低く、障害者の有能性を高く評価するほど、その傾向が強まることを見出している。また、成果に見合った処遇が与えられるべきとするメリトクラティックな志向性が強い者は、弱者優遇策に反対する傾向がある（Bobocel, Son Hing, Davey, Stanley, & Zanna, 1998）。個人の倫理観に訴える平等主義教育を励行しても、かえってその理念を凌駕するイデオロギーが顕現化し差別的処遇が容易に正当化される可能性があることが示唆される。

社会的アイデンティティと拡張接触

自己同一視する集団（内集団）への所属性に基づき形成される社会的アイデンティティは人々の心の拠り所となるため、これを脅かすものには敵対的態度がとられやすい（Branscombe & Wann, 1994）。男性異性愛者がゲイに対して差別的態度をとるのも、彼らとの差別化を図り男性としてのジェンダー自尊心を維持防衛するためであるとも言われている（Falomir-Pichastor & Mugny, 2009）。また、同性愛者と交流していると、周囲から自分も同性愛者と間違われるのではないという社会的感染不安が差別的態度を強めることが示されている（Buck, Plant,

¹ 2016年7月26日、神奈川県相模原市にある知的障害者施設に男が侵入し、入所者ら多数が刃物で刺され、19人が死亡し、26人が重軽傷を負った事件（『毎日新聞』7月26日）。

² 朝日新聞デジタル 2016年8月8日
Retrieved from <http://www.asahi.com/area/kanagawa/articles/MTW20160808150150001.html>

Ratcliff, Zielaskowski, & Boerner, 2013)。個人の精神基盤である社会的アイデンティティが差別の源泉となる点に問題のむずかしさがある。

しかし、鈴木・池上（2015）は、女性異性愛者の場合、女性としてのジェンダー自尊心が高い者ほど、レズビアンに寛容であることが明らかにされている。これは、女性のアイデンティティの中核をなすのは、異性愛志向ではなく、他者（弱者）への寛容性であるからだと考えられている。この知見は、差別問題の解決に向けて示唆的である。人々は自己同一視する内集団の価値規範に従おうとするため、内集団の価値体系を再構築することによって、差別的態度の低減につながる可能性があるからである。上述した社会的感染不安が友人仲間の態度に規定される点も注目される（Cascio & Plant, 2016）。個人の行動は本人の主義・信条のみによって規定されるわけではない。鈴木・池上（2018）は、教員が学校現場において性的マイノリティへの差別問題に積極的に取り組むかどうか、教員自身の態度だけでなく、同僚の教員の態度も影響することを見出している。拡張接触理論は、自分が所属している集団（内集団）のメンバーが、相手集団（外集団）のメンバーと親しく交流している様子を観察すると、外集団への態度が好意的になると説いている。外集団に寛容な規範が内集団に共有されていることが知覚されるからだと考えられている（Wright, Aron, McLaghlin-Volpe, & Ropp, 1997）。

結語

差別や偏見の解消には、個々人に直接働きかけ意識改革をはかるよりも、拡張接触を通して準拠する集団環境に対する認識を変えることが有効かもしれない。

新しい偏見とヘイトスピーチ（差別扇動表現）

高 史明

筆者はこれまで、「新しいレイシズム」の観点から、在日コリアン（日本に居住する韓国・朝鮮人）へのレイシズム（人種・民族偏見および差別）について研究してきた。「新しいレイシズム」とは、レイシズムが公には許容されないものとなった現代社会において、より隠微な形で抱かれ表出されるレイシズムを指す。McConahayやSearsらが提唱し研究してきた「現代的レイシズム」ないし「象徴的レイシズム」（レビューとしてSears & Henry, 2005）、DovidioやGaertnerらが提唱し研究してきた「回避的レイシズム」（レビューとしてDovidio & Gaertner, 2004）などが該当する。

筆者が特に注目してきたのは前者であるが、これは「黒人は劣っている」というような露骨なレイシズムに

対して、「差別は既に解消されており、黒人の方が貧しいのは単に努力不足のせいである。にもかかわらず黒人はありもしない差別の文句を言い、不当な特権を得ている」という信念にもとづく、隠微なレイシズムである。このレイシズムはもともとアメリカでの黒人に対する人種偏見を捉えるために提唱されたものだが、その後、女性（Swim, Aikin, Hall, & Hunter, 1995）、同性愛者（Walls, 2008）、在日コリアン（高, 2015）などに対しても、相似物である偏見が見いだされている。

こうした「新しい偏見」の議論から、本稿では特に以下の2つの観点に注目したい。1つは、現代の偏見は、マイノリティの「特権」への批判、すなわち「不公正」への疑義という形式を取って表出されるものであるということである。もう1つは、人種・民族偏見を抑制する社会規範があったとしても偏見はより隠微な形で表出されるということである。

教育場面への示唆1：「公正」を巡る問題

まず「公正」の認知について議論する。社会が公正であることは個人にとって非常に重要である。また「差別」という語も、単に集団を「区別」とすることと異なり、「不適切かつ、不公正たりうる処遇（inappropriate and potentially unfair treatment）」を指し（Dovidio, Hewstone, Glick, & Esses, 2010）、それゆえに解消が求められるものである。ただし、「新しい偏見」に関しては、不公正の存在ゆえに不利益を被っているという申し立てがマイノリティの側ではなく、マジョリティの側からなされるという点が特徴的である。

そもそも人々はどのようなときに、物事が「公正である」と認知するのであろうか。ここでは分配的公正——リソースの分配を巡る問題——に限定して、その基準を3つ挙げる。

1つ目は、より多く貢献した者がそれに比例した見返りを受けるべきであるという衡平基準である。例えば、営業成績に応じて高い成果給が与えられることは、公正とみなされるだろう。

2つ目はリソースの分配は平等になされるべきと言う平等基準である。例えば基本的人権は誰に対しても平等に保障されるべきものであり、例外を設けることは不公正とみなされる。

3つ目は、リソースへの必要性に応じて分配を受けるべきであるとする必要性基準である。例えば公的医療保険による支援を受ける者（傷病により支援の必要が生じた者）と受けない者（傷病を経験しなかった者）がいるという「不平等」は、この基準に照らして、不公正とは見なされない。

これらの基準はそれぞれ、上述のようにある問題系においては妥当なものであるが、どんな問題に対してても常に適切なわけではない。例えば、衡平基準が企業内での報酬の分配に役に立つからといって、同じ基準を人権問題にまで適用して、社会に貢献していない人々の基本的人権を制限するというのは、恐ろしいアイデアである。

不適切な基準を解釈のスキーマに用いることは、自分たちの権利が不当に損なわれているという認知をもたらしうる。例えば電車の優先席を巡っては、それが衡平基準によるものであるかのような主張がなされることがある。曰く、「高齢者は今の豊かな日本を築いた人々だから」「妊婦は将来働いて税金や年金を払う子どもを宿しているから」席を譲られる権利(価値)があるというのである。しかし、現在働いて税金や年金を納めている若く健康な人々にとっては、自分たちがそれらの人々より社会の役に立っていないというのは首肯しがたく、にもかかわらず優先席が存在することは「弱者特権」のようにも感じられるだろう。ところが、優先席は本来、座席をより必要としている人々に必要性基準により割り当てられるものであって、本人が社会に貢献しているかは全く関係がない。

また一部のマイノリティにおいて生活保護の受給率が高いことは、そのマイノリティに支援を必要とする者＝貧しい者が多いことを示しているが、この背景を無視して「平等でない」ことのみに注目すれば、不公正がなされているようにも感じられるだろう。

公正という重要な概念のこうした多義性は、教育場面でも丁寧に伝達される必要がある。例えば、教師にとって、衡平基準を強調しそこからの逸脱は不公正であると教えることは、教室運営のための便利なやり方であるかもしれない。働かざる者食うべからず、だからクラスで発言権がほしければ日直や係の仕事をちゃんとしなさい、将来社会の役に立つ人間にならなければ自分の権利を主張できないから今から真面目に勉強しなさい、と訓示するといった具合に。しかし、この衡平基準が適切な問題系もあればそうでない問題系もある。同じことは他の2つの基準についても言える。ある単一の基準が公正の唯一の基準であるかのように単純化して生徒を指導することは、その基準が本来不適切な場面における不寛容を育てることに繋がりかねないのである。

教育場面への示唆2：隠語や符丁による攻撃

もう一つの示唆は、差別的な攻撃は社会的規範や親・教師の罰を回避するような形を取るということである。

ある。外国人を害虫呼ばわりするような攻撃的な言動は教師から制されることが多いだろうが、外国人が劣ったものであることを前提にして成立する隠語や符丁は、より見とがめられにくいかもしれない。

例えば、「マンセー」という語は、インターネット上でしばしば揶揄的に用いられている。日本語の「万歳」に当たる朝鮮語が日本語に転じたものであるが、万歳ではなくあえてマンセーと表現するのは、他者の示す称賛が「いかにも朝鮮人がやるような、盲目的で非合理的な賛美」であるというニュアンスを持たせるためである。また、「ファビョる」という語は、もともと朝鮮語の「火病」が日本語動詞化されたものとされるが、インターネット上では「激しいかんしゃくを起こすこと」を指すものとして用いられている。これも朝鮮語の音が用いられるのは、「朝鮮人のような未熟な人間性に由来し、正当な理由がない」といったニュアンスを持たせるためである。これらの語は、主として韓国・朝鮮人の振る舞いを表現するのに用いられるが、日本人の振る舞いについても、それが(朝鮮人のように)自分たちとは異質な、非合理的なものであることを強調するためにしばしば用いられる。

こうした隠語・符丁は、背景を知らない者にとってはただの若者言葉や多少行儀が悪いだけのスラングに見えてしまうかもしれない。しかし、ある人々が劣っていることを前提とするコミュニケーションが大人に見とがめられることなく学校などで行われることは、当事者にとって著しい苦痛を与えるものになりかねない。したがって教員その他の教育に従事する者は、伝統的に差別的な表現とされてきたものだけでなく、こうした新しい表現についても積極的に学ぶ必要がある。

まとめ

以上2つの観点に絞り、「新しい偏見」の議論の教育場面への示唆を提示した。偏見や差別は、戦後の民主主義社会においては比較的歴史が長く、古ぼけた問題に感じられるかもしれない。しかし、現代社会におけるそれに対処するためには、教育者は常に知識をアップデートする必要がある。

指定討論

三氏の話題提供について思ったこと、あれこれ

吉田寿夫

教える者の理解が深まれば教育の質は自ずと向上するのであり、教える側が当該の事柄についての自己学習・生涯学習を継続することが非常に重要だと考えられる。このような意味で(すなわち、差別という事象に関す

る、主に教える側になるであろう我々の理解を広げたり深めたりするうえで、今回の話題提供は、いずれも有用だと思えるものであった。筆者は、このような思いのもと、指定討論者として、以下のような種々のコメントや疑問の投げかけなどを行った。

そもそも差別とは

差別という言葉（概念）は、他の言葉と同様、曖昧な面を多分に有している。当然のことながら、差別とは言えないであろう区別も存在しており、国語辞典などでは「正当な理由がないのに人によって異なる扱いをすること、劣ったものとして不当に扱うこと」などといったことが記されている。しかし、この「（どうであれば）正当な理由（があるとと言えるのか）」とか「（どのような場合に）不当（であることになるのか）」ということは、論理的に明確な結論が出せるものではなく、各自の価値判断といった、主観が介在せざるを得ない事柄であろう。したがって、「差別」と「差別ではない区別」の一線は曖昧であり、「多くの人が感情的に同意できるか」ということが関わる問題である面が多分にある」とも言えよう。そして、差別という言葉（概念）にこのような曖昧な面があることを教育をする側が強く意識しておいた方がよいと思うとともに、教育を受ける側にも認識されるよう働きかける必要があるものと考えられる。

また、「どのようなことは差別で、どのようなことは差別ではないか」といった判断結果を（絶対的なものとして）教え込むのではなく、自分なりに（独善的にはなく）判断できるようになってもらうこと（すなわち、このようなことについての考え方について学んでもらうこと）が大切であるとともに、さまざまな他者との議論を通して差別に関わる考えを広げたり深めたりする必要があることを認識してもらうことも重要であろう。

差別と偏見の違い・関係および内心の自由の問題

差別と偏見という言葉は「偏見や差別」と並記されることが多い。しかし、偏見は脳内の表象ないし脳内で生じている事象（すなわち、直接は観察されない頭の中のこと）であるのに対して、差別は表出された（直接観察される）言動である。このことを踏まえると、当然のことながら、差別は、なんらかの悪影響を及ぼすならば、是正の必要性が（通常は）高いものであろう。しかし、偏見は、一般的には変容を促す必要があるものだと考えられる一方で、内心の自由という観点からは、「思っても悪影響を及ぼすことにつながる言動がなされなければ構わないのでは」といった考えを否定できないようにも思える。そして、このようなことに関連して、

池上氏が提示した（脳内の連合を変えようという介入であろう）ステレオタイプの脱活性化には倫理的な面での懸念を若干感じてしまう。

また、通常は「偏見→差別」という影響過程のみが想定されがちであるが、「（感情や利害→）差別→（後付けの正当化による）偏見」などというような影響もあり得るのではないかと（たとえば、高氏が提示した現代的レイシズムの信念にも「後付けの正当化」といった面が多分にあるのではないかと）考えられる。

差別に関わる社会的理念

障害者や高齢者に対する差別に関わることでは「福祉とは何か、福祉制度はなんのために築かれてきたのか」ということに関する知識などに基づいた「あるべき社会の姿」に関する考えが重要になるであろうことが例示しているように、差別についての判断の根本には、「どのような社会を良しとし、目指すか」とか「（高氏が述べた）どうであれば公正か」といったことについての考えが関わっていると考えられる。したがって、このようなことについての認識を（現代社会において一般に認められている）真つ当だと考えられるものにするための（早期からの）働きかけも必要であろう。

ただし、このようなことも論理的に絶対的な答えを出すことはできない事柄であり、先に述べた内心の自由の問題が懸念される。が、元来、教育は価値と無縁ではあり得ないものである。したがって、やはり、以上のようなことに関わる歴史的事実や現状について学んだうえで（具体的には、いろいろな人の話を聴いたり、本などを讀んだりしたうえで）、多くの（考えの異なる）他者と議論をし、自身の考えを構築していくように働きかけることが大切だと考えられる。

なお、池上氏と高氏の話にあったように、障害者（であるとされている人たち）や一般にLGBTと呼ばれている人たちが高齢者などに対する差別意識には、（目先の利益・成果の追求、効率性の重視といった）資本主義の論理が多分に関わっているものと考えられる。個人的見解といった面が強い主張ではあるが、このようなことについても、高校生くらいの段階で、疑問の投げかけを行っても良いのではないかと考えられる。

さまざまな差別（や偏見）を整理する必要性

人種ないし民族ないし国籍に基づくもの、性別に基づくもの、年齢に基づくもの、性的指向に基づくもの、信仰する宗教に基づくもの、障害の有無に基づくもの、職業に基づくもの、外見に基づくものなど、差別にはさまざまな種類がある。これらには共通な面がある一方で、「差別の対象となる人たちとの接触経験・接触可

能性、それらの人たちについての情報の量」,「それぞれの集団の人数比(マジョリティ・マイノリティという差異が存在するか否か)」,「なんらかの点で弱い立場にある人たちに対するものか否か」,「社会的カテゴリーの曖昧さや可変性」,「意識性ないし意図性」,「感情や利害が関わっている程度」などのさまざまな点で差異も存在する。そして、それらによって、「なぜ生じるか」,「なぜなくなるか」や「どう対処したら良いか」などが異なるものと考えられる。したがって、以上のことを踏まえてさまざまな差別(や、それらに関わる偏見ないしステレオタイプ)について整理することが必要ではないかと考えられる。

なお、以上のことに加えて、「話題提供において提示された事柄以外で取り上げる必要性が高いと考えられること」として、以下のようなことを提示した。

- (1) マイクロアグレッションと呼ばれているような、自分の行為が差別になり得る(相手にネガティブな影響を及ぼす可能性がある)ことを(現代的レイシズムのように「認めない」のではなく)認識していないケースや良かれと思ってしていることが相手にネガティブな影響を及ぼしているケース
- (2) 無自覚なまま自動的になされているであろう差別に関する研究
- (3) 差別や偏見の中には、普通である(ないし、マジョリティである)ことを良しとして、「そうでなければならない」という規範や「そうであってほしい」という期待が形成され、「普通であることの押しつけ」になっていると考えられるものがあること
- (4) 「優性遺伝・劣性遺伝」,「ブラック○○」などといった、差別の発生や維持・助長につながる可能性がある言葉の不用意な付与・使用に関わる問題
- (5) 差別される側の心理・行動に関すること、および、差別であろう言動を第三者的な立場で見聞きした人の心理・行動に関すること

また、時間がなかったために当日は話すことができなかったが、配付資料において、(話題提供の内容を踏まえたうえで)差別の解消に向けた働きかけに関する種々のコメント・提言を行った。

学校現場における差別と向き合う

伊住継行

筆者は、15年間公立小学校で教諭を勤め、現在、小学校教員の養成に携わっている。筆者の専門は道徳教育であり、差別に関して専門的に研究しているわけではない。本シンポジウムでは、社会心理学者の大淵先

生、池上先生、高先生の話題提供を受け、小学校教諭としての実務経験を基に、学校現場における差別と向き合うための効果的な対応について検討した。

差別とは

国語辞典でその意味を調べると、「1. ある基準に基づいて、差をつけて区別すること。扱いに違いをつけること。また、その違い。」,「2. 偏見や先入観などをもとに、特定の人々に対して不利益・不平等な扱いをすること。また、その扱い。」と記されていた。1は主に個人レベルでの差別を扱い、2は主に集団レベルでの差別を扱っている。上記2つの定義のうち、担任した学級では特定の児童に対する差別が問題となっていた。そこで、1の定義に基づき差別事例を紹介することにした。

学校現場における差別事例

学校現場における差別を、前述した1の定義に基づいて考えてみる。まず、「ある基準に基づいて」の「ある基準」には、好悪感情、見た目の清潔さ、学力などの基準が考えられる。また、「差をつけて区別すること」の区別の内容として、特定の児童を他の児童または教師などが優遇したり(最良)冷遇したり(仲間外れ、無視など)して公平に扱わないことが考えられる。そういった事例を3つ取り上げ、筆者の対応とその結果を基に差別の特徴について考えてみる。なお、本事例は個人情報保護の観点から事例の趣旨を変えないよう一部事実と異なる情報に変えている。

1つ目の事例は、学級の数名から避けられていた5年男子Aである。Aは識字障害のような状態であった。読み書きに困難があり、身なりも清潔とは言えなかった。しかし、本人は真面目に課題に取り組み、人に迷惑を掛けるような言動をすることはなかった。そのようなAは5年になった当初から一部児童から避けられるなどの差別を受けていた。しかし、本人はあまり差別されていると自覚していなかった。

2つ目の事例は、他の児童よりマイペースで大人しい4年女児Bである。Bは歌が好きで合唱団に入っていた。学校で祭りのイベントをした際、所属学級でも遊びの店を出店することになった。来店した他の児童にスタンプを押すなど児童なりに工夫を考えていたが、そのスタンプを誰が持ってくるかの話で、Bは一部の児童からスタンプの持ち込みを拒否される。また、友達と2人で係活動を行っていたが、2学期途中、その友達とも喧嘩した。周りの児童もあまり近寄らなくなるなど差別的な対応を受け、孤立しがちになった。その頃、Bの保護者が現状を心配し、学校に相談に来ら

れた。

3つ目の事例は、3年女児Cである。Cは子育て世帯が多数いるアパートに住んでいた。そのアパートには上は5年生から下は園児まで多くの子どもが住んでいた。バレンタインの日にCはそのアパートの最年長の女児から友チョコをもらった。しかし、それ以降、同じアパートの友達から仲間外れにされたり無視されたりするようになり、差別を受けるようになった。Cには何の心当たりもなく、突然、差別が始まったため、保護者に相談した。その後、保護者から学校に相談があり、同じアパートの児童を集めて話を聞くことになった。

差別事例への対応

上記事例への対応を含め、学級担任として差別に向き合うための基本方針が3点あった。(1) みんなと仲良くできなくてよい。ただし、授業などでの課題解決は協力する。その結果仲良くなることがある。(2) 自分が思うことは自由だが、言葉や態度として表出することは自由ではない。(3) 学級の児童に、長所や課題はみんな違うのだから意図的な差別を行うと伝え、一人ずつ違う対応をする。

差別事例への具体的な指導として、被差別児童や差別児童にヒヤリングしたり児童と教師、児童同士で話し合っただけの方針を決めたりするなど関係する児童に指導する直接指導と被差別児童から差別児童を遠ざける、または全体を巻き込みながら差別が問題とならないようにする間接指導を行った。

差別事例への対応の結果

まず、Aの事例では、Aへの差別的言動を見聞きしたときには該当児童に対して直接指導した(Aが差別されたと思わないようにしながら)。一方で、学級での班編成やグループ分けを工夫し、Aを受け入れ可能な児童らとグループングした。グループ内の活動が支障なくできるようにしているのを見計らい、次第に様々な児童とグループを組ませながら集団作りを行った。その結果、年間を通して差別が表面化し、問題となることはなかった。これは池上先生が紹介された拡張接触効果による差別意識の低減が見られた事例だと思われる。

次に、Bの事例では、Bと仲の良い児童に直接話を聞いて対応を考えた。また、休み時間や授業場面などを使ってBを認める機会を意図的に増やした。その一方で保護者の不安を軽減するために面談をした。その結果、児童は少しずつ友達関係を元に戻していった。これは池上先生が紹介された被差別児童のステレオタイプの脱活性化が機能した事例であると思われる。

最後に、Cの事例は、放課後のことであるが同じア

パートに住む差別をしている児童を集めて直接指導をした。その中で、一部の児童が「友チョコのお返しがないような子とは遊ばなくてよいという話を保護者から聞いた」と言っていた。そこで、児童らに差別をされた人の思いを考えるよう指導した結果、Cに謝罪し関係がよくなる児童がいた。一方、Cは一部児童に対して不安な気持ちが拭い去れないままだと事後報告を受けた。これは、大淵先生が言われる内集団と外集団の差別の構造に近いのではないだろうか。つまり、内集団にいたCだが、バレンタインデーのチョコレートの授受をきっかけに集団の外に出されることになり、他の児童の差別意識が高まったと考えられる。

差別事例の背景にあると思われる要因

Cの事例のように、保護者が児童に対して影響を及ぼしている可能性があることがわかった(ただし、これは児童の話を基に判断しているため、本当に保護者が影響を及ぼしたかどうかは不明確である)。また、差別をする児童の背景には、(1)被差別児童に関わることで被る不利益(被差別児童と関わることで他の児童から避けられる、教師からの聞き取りが増え休み時間が削られるなど)を避けること、(2)被差別児童を自分より低く見て指示・命令など一方的な関わり方をすることがあることがわかった。

結論

児童の差別したい気持ちを否定することはできない。しかし、これまでの実務経験から直接指導による差別の表出の改善は可能だと思われる。一方、被差別児童を巻き込んで遊ぶ、教師がその児童の味方・応援団になるなど間接指導で被差別児童への偏見を和らげ差別を表出しづらくすることも効果的であると思われる。

また、児童間の差別の場合、保護者が児童の差別意識を正当化している可能性が考えられる。保護者の関与が大きく、差別意識が高い児童がクラスに多い場合は差別表現の抑制が困難になる場合があるだろう。

今回は小学校現場の差別事例を紹介した。これが生徒になると、高先生が言われる在日コリアンに対するスラングによる差別といったより隠微な形での差別が問題となってくるだろう。教師はこういった様々な形で現れる差別に敏感に対応していくことが求められる。

社会心理学では、性別や社会的階層などのカテゴリーを基に集団に対する差別を扱うが、今回の事例のような児童同士の差別が小学校現場では問題となることが多いのではないだろうか。本シンポジウムを通して、学校現場における差別に効果的に対応するために社会心理学の知見を応用することの有効性を感じることができた。

シンポジウムを終えて

森永康子

もうずいぶん昔のことだが、『青い目 茶色い目～教室は眼の色で分けられた～』というドキュメンタリーを見たことがある（2007年にもNHK BSで放送されたい）。突然、目の色で優劣を決められた子どもたちが、仲の良かったクラスメートを目の色でからかい始めたといった話や、寂しそうに立ちすくむ生徒たちの姿が描かれていた。私が特に印象深かったのは、クラスの中で一人だけ目の色で区別するのはおかしいという態度を示す生徒がいたことだ。私が同じような状況におかれたら、この生徒のように立ち向かう自信は、正直言ってあまりない。むしろ、差別する側に立った態度を取る自分の姿が思い浮んで戦慄する。何と言っても「優れている」と言われることは嬉しいし、目標に向かって頑張ってきた場合には努力が報われる気がするだろう。しかし、優劣の判断には他者との比較が入ることが多く、自分が優れているためには劣った他者が必要である。これは個人間の問題だけでなく、自分が所属する内集団とそれ以外の外集団の関係にも当てはまる。歴史の中で為政者によって作られた社会階層の制度には、個々人が持つさまざまな動機——本来は社会にとっても個人にとっても望ましいものかもしれない動機——をうまく利用したものがあるのではないだろうか。21世紀の現代では、社会支配のための制度として作られた差別構造はそれほど存在しないのかもしれないが、それだけに個人の動機に伴う偏見や差別が可視化されるようになってきたように思う。だからこそ個々人がどのような態度や行動をとるかが、差別に対抗するための鍵となるし、心の問題に焦点を当てる心理学者の研究知見が重要になってくる。

本シンポジウムでは差別をめぐる話題提供者と指定討論者から、研究者として、また、実践者として、さまざまなお話を提供いただいた。幅広い内容であったため、ここでそれらをまとめることは不可能であるが、公正動機、差別が生じるメカニズムとその解決策、現代的な差別、差別研究に必要な視点や学校現場での取り組み例など、差別問題に関心を寄せる人々にとって有益なシンポジウムであったと確信している。社会が存在する限り、差別は続くであろう。おおげさかもしれないが、差別に関する研究は、あらゆる人の人権が守られる社会を築くためにも必要なものだ。基礎的な研究から教育現場への応用まで、社会心理学者に託された課題は多い。今後もこうした課題に対する社会

心理学者の取り組みの進展を報告していければと考えている。

引用文献

- Adachi, N., & Ikegami, T. (2019). Do family norms justify the expression of homophobia? *The 20th Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology, Program Book*, Posters F-181, pp. 85.
- Allen, T. J., Sherman, J. W., & Klauer, K. C. (2010). Social context and the self-regulation of implicit bias. *Group Processes & Intergroup Relations*, 13, 137-149. doi:10.1177/1368430209353635
- Bobocel, D. R., Son Hing, L. S., Davey, L. M., Stanley, D. J., & Zanna, M. (1998). Justice-based opposition to social policies: Is it genuine? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 653-669. doi:10.1037/0022-3514.75.3.653
- Branscombe, N. R., & Wann, D. L. (1994). Collective self-esteem consequences of outgroup derogation when a valued social identity is on trial. *European Journal of Social Psychology*, 24, 641-657. doi:10.1002/ejsp.2420240603
- Brosnan, S., & de Waal, F. B. M. (2014). Evolution of response to (un) fairness. *Science*, 346(6207). doi:10.1126/science.1251776
- Buck, D. M., Plant, E. A., Ratcliff, J., Zielaskowski, K., & Boerner, P. (2013). Concern over the misidentification of sexual orientation: Social contagion and the avoidance of sexual minorities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 105, 941-960. doi:10.1037/a0034145
- Cascio, J. L., & Plant, E. A. (2016). Judged by the company you keep? Exposure to nonprejudiced norms reduces concerns about being misidentified as gay/lesbian. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 42, 1164-1176. doi:10.1177/0146167216652858
- Crandall, C. S., & Eshleman, A. (2003). A justification-suppression model of the expression and experience of prejudice. *Psychological Bulletin*, 129, 414-446. doi:10.1037/0033-2909.129.3.414
- Dovidio, J. F., & Gaertner, S. L. (2004). Aversive Racism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 36, pp. 1-52). San Diego, CA: Elsevier Academic Press. doi:10.1016/S0065-2601(04)36001-6

- Dovidio, J. F., Hewstone, M., Glick, P., & Esses, V. M. (2010). Prejudice, stereotyping and discrimination: Theoretical and empirical overview. In J. F. Dovidio, M. Hewstone, P. Glick, & V. M. Esses (Eds.), *The SAGE handbook of prejudice, stereotyping, and discrimination* (pp. 3-28). London, UK: SAGE Publication Ltd. doi:10.4135/9781446200919.n1
- Engelmann, J. M., Over, H., Herrmann, E., & Tomasello, M. (2013). Young children care more about their reputation with ingroup members and potential reciprocators. *Developmental Science*, 16, 952-958. doi:10.1111/desc.12086
- Falomin-Pichastor, J. M., & Mugny, G. (2009). "I'm not gay ... I'm a real man!": Heterosexual men's gender self-esteem and sexual prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 1233-1243. doi:10.1177/0146167209338072
- Fehr, E., Bernhard, H., & Rockenbach, B. (2008). Egalitarianism in young children. *Nature*, 454, 1079-1083. doi:10.1038/nature07155
- Hamlin, J. K., Wynn, K., Bloom, P., & Mahajan, N. (2011). How infants and toddlers react to antisocial others. *PNAS*, 108, 19931-19936. doi:10.1073/pnas.1110306108
- Harbaugh, W. T., Krause, K., & Liday, S. J. (2002). Bargaining by children. *University of Oregon Economics Working Paper*, No. 2002-4. doi:10.2139/ssrn.436504
- Horner, V., Carter, J. D., Suchak, M., & de Waal, F. B. M. (2011). Spontaneous prosocial choice by chimpanzees. *PNAS*, 108, 13847-13851. doi:10.1073/pnas.1111088108
- 池上知子 (2014). 差別・偏見研究の変遷と新たな展開—悲観論から楽観論へ—教育心理学年報, 53, 133-146. doi:10.5926/arepj.53.133
- Izuma, K. (2012). The social neuroscience of reputation. *Neuroscience Research*, 72, 283-288. doi:10.1016/j.neures.2012.01.003
- Kanokogi, Y., Inoue, Y., Matsuda, G., Butler, D., Hiraki, K., & Myowa-Yamakoshi, M. (2017). Preverbal infants affirm third-party interventions that protect victims from aggressors. *Nature Human Behavior*, 1, Article number 0037. doi:10.1038/s41562-016-0037
- 木田千裕・矢田尚也・池上知子 (2017). 社会的支配志向性とステレオタイプが身体障がい者に対する支援的態度に与える影響—日本グループ・ダイナミックス学会第 64 回大会発表論文集, 127-128.
- Leimgruber, K. L., Shaw, A., Santos, L. R., & Olson, K. R. (2012). Young children are more generous when others are aware of their actions. *PloS ONE*, 7, e48292. doi:10.1371/journal.pone.0048292
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 808-817. doi:10.1037/0022-3514.67.5.808
- Nowak, M. A., & Sigmund, K. (2005). Evolution of indirect reciprocity. *Interim Report*, IR-05-079. Retrieved from <http://pure.iiasa.ac.at/id/eprint/7763/1/IR-05-079.pdf> (2019 年 12 月 4 日)
- 奥村優子・池田彩夏・小林哲生・松田昌史・板倉昭二 (2016). 幼児は他者に見られていることを気にするのか—良い評判と悪い評判に関する行動調整—発達心理学研究, 27, 201-211. doi:10.11201/jjdp.27.201
- 大澤裕美佳・池上知子 (2014). エイズに対する感染不安と道徳的非難に及ぼすポジティブな社会的文脈の効果—関西心理学会第 126 回大会発表論文集, 43.
- Sears, D. O., & Henry, P. J. (2005). Over thirty years later: A contemporary look at symbolic racism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 37, pp. 95-150). San Diego, CA: Elsevier Academic Press. doi:10.1016/S0065-2601(05)37002-X
- Sidanius, J., & Pratto, F. (1999). *Social dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression*. Cambridge, MA: Cambridge University Press. doi:10.1017/CBO9781139175043
- 鈴木文子・池上知子 (2015). 異性愛者のジェンダー自尊心と同性の同性愛者に対する態度—社会心理学研究, 30, 183-190. doi:10.14966/jssp.30.3_183
- 鈴木文子・池上知子 (2018). 何が教育現場における性的マイノリティをめぐる取り組みを妨げているのか—関西心理学会第 130 回大会発表論文集, 50.
- Swim, J. K., Aikin, K. J., Hall, W. S., & Hunter, B. A. (1995). Sexism and racism: Old-fashioned and modern prejudices. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 199-214. doi:10.1037//0022-3514.68.2.199
- 高 史明 (2015). レイシズムを解剖する—在日コリアンへの偏見とインターネット—勁草書房

- Thaler, R., & Sustein, C. R. (2008). *Nudge: Improving decisions about health, wealth, and happiness*. London, UK: Yale University Press. (セイラー, R.・サンスティーン, C. 遠藤真美 (訳) (2009). 実践行動経済学 日経 BP)
- Tomasello, M. (2009). *Why we cooperate*. Cambridge, MA: MIT Press. (トマセロ, M. 橋彌和秀 (訳) (2013). ヒトはなぜ協力するのか 勁草書房)
- Walls, N. E. (2008). Toward a multidimensional understanding of heterosexism: The changing nature of prejudice. *Journal of Homosexuality*, 55, 20-70. doi: 10.1080/00918360802129287
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (2001). Spontaneous prejudice in context: Variability in automatically activated attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 815-827. doi:10.1037//0022-3514.81.5.815
- Wright, S. C., Aron, A., McLaghlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 73-90. doi: 10.1037/0022-3514.73.1.73